

GE世界で生きる吸血鬼 生活日記

クイン・カナリア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

転生した彼が吸血鬼としてゴツドイーターの世界で生きるお話。

目次

吸血鬼は生きる。	1
吸血鬼は諦める	14
吸血鬼は逃避する	29

吸血鬼は生きる。

3ヶ月と12日目 吹雪

日記を拾った。この世界では娯楽というものが少ないので、暇つぶしに書いてみようと思う。ちなみにペンはぶつ壊れた車の中から拝借したよ。

まず、もし万が一この日記を読む人がいた場合のために自己紹介でも書いておこうか。つというか、それ以外何を書けばいいのか……やっぱり陰キャに日記は難しい。

そんなことはどうでも良くて。

俺の名前はカナリア。以前は○○ ○○って名前だったけど……あれ文字化けするな？ ……世界の修正力か？ まいいや。

以前はつて言うのはちよつとした事情がある。非現実的で物理的、科学的ではないけども——俺は転生者だ。テンプレのように神様には会わなかったけれど、死んでいつの間にかこの世界で別人として生き返ってるのだから転生で問題ないだろう。ちなみに多分憑依者でもある。

憑依先は……なんて言うのかなあ。

この世界にはアラガミという存在がいて、それに対抗するゴッドイーターって人たち

がいるんだけれども。そのゴットイーターと似て非なるもの、と言えがいいのか。

吸血鬼レヴナントという人ならざる化生。人の血を啜ることではしか自我を維持出来ない哀れな死者であり生者。

矛盾してる？ そりやそうだ、だって真正銘この吸血鬼は死んでから生き返っているのだから。心臓を破壊されなければ粒子化し、飛散後再形成されることによつてほぼ不死を体現している存在。

まあ、俺はそれのちよつと特殊なやつに憑依してしまつたんだ。だから転生と憑依。こんな所かな、たぶん。何分にも日記を今まで書いたことないから初日かけるとしたらこの程度。初めてにしては書いたほうじゃない？ 褒める。

3ヶ月と13日目 吹雪

アラガミうまうま。

昨日書き忘れたけど、俺はアラガミを捕食することが出来る。いや、正確には吸血かな？ 吸血ブラッドヴェイル牙装つてのがあるんだけど、簡単に説明すれば戦闘中にも敵の血を吸えるように造られた吸血鬼専用装備。

攻撃も出来て尚且つ腹も満たせる中々良い装備だ。どういふ原理か、大体自分の意思通り動かせるし。

それを使ってアラガミをぶち殺すことが出来るわけ。ちなみにこれに気付いたのは転生4日目の時かな。以来便利だから多用してる。

正直、武器類は結構持つてるけど、吸血牙装の利便性が高すぎて……ねえ？

アイヴィ型って呼ばれるものがあるんだけど、それを使ってこっそり地中からグサツて殺るのが^{たの}楽しすぎて^{ラッ}楽すぎて。一応体が鈍らないよう積極的に近接戦はするようにしてるけど……ほら、今は吸血鬼だけど元は人間だし。楽な方に流れたくなるのは仕方ないよね。

ああそうそう。武器って言っても別にゴツドイーターが使う神機ではない。なんて言うか、これも原理はわからんけど自分の体内に粒子化して武器とか防具を保存出来るらしくてね。その中に吸血鬼御用達の吸血機構がついた剣とか槍とか斧とか銃剣とか入ってるんだ。

それを使ってサクツとやってる訳よ。

最初の頃は前の身長と今の身長が噛み合わなくて、更にいえば力の制御とかもまままらなくてねえ……苦労したもんだ。人間死ぬ気でやれば3ヶ月で超高速戦闘とか出来るようになるんだね。今は吸血鬼だけだ。

3ヶ月と14日目 吹雪

はいどーも。今日も今日とて目に付いたアラガミをチュウチュウしてぶっ殺して斬りつけて刻んで細切れにする刺激的な生活だったよ。

——うん、だった。過去形だ。

何があつたかつて言うのと、なんて言うんだらうなあ……子供を拾った？ 助けた？ 感じ。

この世界では珍しくもない親無し家無し子の姉弟。名前はリンドウとツバキつて子。飢えて墮鬼^{ロスト}——ああ、えつと。吸血鬼は血に対する渴望を持つてるんだ。所謂血の渴きつて呼ばれてるんだけど。それが限界を超えると自我を持たず、本能に忠実で、壊し喰らう事しか脳の無い化け物に堕ちちやうんだよ。現状、渴きに悩まされたことは一度くらいしか無いから俺にも適応されるかは分かんないけど——に堕ちたくないからアラガミぶち殺そうかなって四方八方歩き回ってたんだけど。その時に見つけたのがこの2人。

家の影の隅、一、二人が縮こまって漸く入れるような隙間に身を竦め抱き合いながら居たのを発見した。

まあ？ 無視してもよかつたんだけどお……正直さ、3ヶ月ほぼ1人で生きてきてて寂しかったから保護した次第。1人2人だったらまあ平気だし。

日記と同じく車の中に放置されてた保存食与えて餌付けしたらすごい懐いてきてく

れて……ふつつ、なんていうか、その……嬉しくなっちゃいましたね……。まあ、顔にはそんなの微塵も出ないんだけど。澄ました顔しやがって。

とはいえ、俺一人でこんな物騒な世界の中2人をずつと保護できる訳も無し。落ち着いたら人が集まってそうな場所に連れていこうと思う。大体の心当たりはあるし。

3ヶ月と15日目

子供って凄いな……。うっかりツバキとリンドウの前でうっかりアラガミ吸血しちゃったんだけど、ツバキはちよつと訝しむだけで追求せず適応しちゃうし、リンドウはすげー！ かつけー！ って詰め寄ってくるし……。おじさん（今は女だけど）そんな無邪気な反応されたら……。もつと見せたくなくなっちゃうじゃないか……。つて訳でアイヴィ型だけじゃなくハウズズ型とか色々見せた。祈る者のシヨールが二枚余ってたから二人ともにあげちゃった。

こう、お近付きの印的な感じで……。いやだつて！ だつてさあ！ しょうがないじゃんしょうがないじゃん!! こいつらくつつつそ可愛いんだぞツバキはちよつと強気で言い方もキツイけどリンドウと話してる時にふと見せる笑顔とかさ！ 多少なりとも警戒してる感じだけどちよちよち着いてきてくれるところとかさ！ リンドウなんかもう物怖じせずにかずか来てでもきらつきらした純粋な目で見つめてくるから

さ……守りたく、なっっちゃうじゃん？

……つて、俺は何に對して言い訳してるんだろうな？

とりあえず言えることは、子供は天使だなと。

3ヶ月と16日目 吹雪

我ながら馬鹿だなあと思う。

———この世界に来て初めて人の目の前で死を経験した。

たぶん、気が緩んでたんだ。慢心してたんだ。今まで一人で大丈夫だったから、少しくらいなら二人お守りしても平気だなんて。

二人を庇ってコンゴウにぶん殴られた時のあの二人の顔が忘れられない。呆然と、何が起こったのかわからないような表情で俺を見てたあの目が……。あの二人は大丈夫だろうか……。幸い、粒子化する前にアイヴィで殺したし、近くに人の匂いがあつたから、運が良ければ保護してもらえるとと思うけど……。

もし保護してもらえてなかったら、なんて考えたら……ダメだな……。

……にしても、この死の感覚は慣れない。一步間違えれば心臓潰されて消滅していた可能性もあるわけで、改めて考えると怖い。

だが、怖いからと言って行動しなければ墮鬼に墮ちてしまう。……まったく、やっぱ

この世界は地獄だなあ……。

……。

……一度だけ、人の中に紛れようとしたことがある。

一人は寂しい。一人は嫌だ。死にたくない……そう考えて、人が集まるところへ行つたこともある。

でも、ダメなんだ。違うんだ。俺は吸血鬼で彼ら彼女らは人間なんだ。姿形は似てるけど全く違う。渴くんだ。本能が、体が。一人二人ならまだ平気だけど、両手で数えきれない人がいて、微かでも血の匂いがしたらその人達がまるで餌や食料のようにか見えなくて——。

だから俺は、この3ヶ月間1人で過ごしてた。

恐ろしかったんだ。人間が食料に見えるようになってしまったら……それはもう、人という残滓を残さなくなったバケモノになってしまうかのようで。

3ヶ月と18日目 吹雪

……ナーバスになってたんだあつて（賢者タイム）。

死んだから動揺したのかな。かれこれ何度かは死んでんだけど……ま、慣れないものはしょうがない。

つと、そうそう。俺が死んだあとちゃんとツバキ達は保護されたみたいだった。彼女の血の匂いはしなかったし。

それだけはちよつとだけ嬉しい。……トラウマになってないといいんだけど。本当に。

4ヶ月と1日目 快晴

ずっとアラガミばかり喰つてたからだろうか。なんか、身体が変化してきたっぽい？
真つ赤だった目が右目だけ青くなつてて。多分これ身体能力も強化されてるな。練血——墮鬼の血を吸い蓄えることによつて使える魔法のようなもの——の保有量が格段に増したし、威力も比べるべくもない。再生能力もずば抜けていて切り落とした次の瞬間には腕が生えてるレベル。

血への渴望も感覚的に少し納まったみたいだし……まるでクイーンのような……まさかね。

俺が憑依したこの体はクイーン……数多の人を殺し、討伐され、封印された憐れで哀れな吸血鬼。

元々は血への渴望をどうにかしようとしてその実験の果てに暴走してしまったひとりの少女。その能力にどことなく似ているような気がする。

……気のせい、ということにしておこう。

4ヶ月と23日目 晴れ

最近眠ることが多くなった。何故だろうか？ 前はアラガミさえ血を吸いがてらぶち殺してれば不眠不休で動けたんだけど……やはり何かが変化したのだろうか。

とはいえ、これ自体に不都合は……まあ、万が一寝てる時に襲われたらという不安がない訳でもないが、それ以外に不都合はない。この世界で生活を初めて睡眠なんて当たり前のことを忘れかけていた俺にとってはちよいどいい事なのだろう。気分転換にもなるしね。だからといって何もしない訳では無いが。

——という訳で。

アラガミが食べ残したビルの中に生活圏を築いてみた。

ボロいソファ（座れないことも無い）にボロいベッド（眠れないことも無い）、ボロいテーブルとボロい椅子を適当に調達してきて適当に置いた簡易的なものだけ。電気は無いし、火も夜に使えばアイツらが寄ってくる可能性もあるため焚けないけど、まああの出来だと思っている。

惜しむらくは娯楽もないところだけど、目を瞑るしかないな。こんなご時世だ、娯楽なんてあり付けるのは上流階級の間人間かゴッドイーターくらいだろう。俺はどちらでもないし、ともすれば平行世界からのインベーターと言われても否定できない存在だから、このボロつちい部屋に家具が妥当なところなのだと思う。

そう言えばヴァジュラを見かけた。思ったよりも弱くて拍子抜けだ。……もしかして原作、始まってないのだろうか？

4ヶ月と24日目 曇り

甘味が食べたい。この際文句は言わないからガールリックチョコフレークでもいい。お菓子が食べたい。

底辺の人並みの生活をしだしたからか、どうにも人間的欲求が強くなってきてる気がする。

こんなことになるならベッドとか調達しなければよかった……家具とかがあるからこんな気持ちになるんだ。過ぎたことは仕方がないとしても、そう思わずには居られない。今更ベッドなどを捨てるなんてことは、早くも夜寝て朝起きる時間が至福であることを考えれば不可能に近い事だ。というかむり捨てたくない。しかしお菓子も食べた

くなってくる……いやゲイシャヌードルとかもいいな。あの甘美な味は記憶にこびり付いて離れない。……………流石に贅沢が過ぎるか、それは。

……しかし……アラガミってどんな味なんだろうか……いや食べないけども。食べないけど……味、ちよつと気になるよなあ……。

4ヶ月と26日目 雨のち曇り

夢を見た。白髪の女性が、玉座のような場所に座っている俺にずっとずっと寄り添っている夢。

大事そうに俺の手を握りながら優しげに、悲しげに微笑んでいた彼女は……一体誰なのだろう……？

……焦燥感のようなものがこびり付いて離れない朝だったが、それはそれとして今日はアラガミを駆り尽くす勢いでぶち殺した。

なんか、そうでもしなければ恥も外聞もなく泣いてしまうような、そんな気がして……後悔はしているけど反省はしていない。おかげで色々スツキリした事だし。

きつと、何度か死んでいるうちに記憶が欠けていたのだろうと思う。今朝の夢はそのかけてしまった記憶の名残。だから見たことも無い彼女に親愛を感じたんだろうと思

う。そうでなければ説明がつかない。

思い返せば、ここ最近『俺』と『私』の境目が曖昧になっていた。

『俺』は俺であって『私』じゃない。たとえこの体が『私』の物だったとしても、俺は俺だ。そこは譲らないし、譲つたら精神的な死を迎えてしまう……と思う。それだけは避けておきたい事だ。

4ヶ月と27日目 土砂降り

主人公の名前はカナリア。継承者の伴侶——そう呼ばれる、クイーンに成り果てる前のクルスから落ちた血英から生み出された存在。その中で主人公である『私』に寄り添い、共に歩き、成長してきた存在は——イオ。そう、イオだ。昨日のあの少女はイオだ。

だとしたらあの玉座のような場所は……つまり、『私』はゲームで言うところの『果てなくとも』でクリアした、ということだろうか。いや、でもあの夢では『私』は眠ったままだ。移動した形跡も消えた形跡も……——眠ってる？ ああなるほど。これはある種夢のようなものなのか。その夢に俺という異物が混ざりこんで、こうして実態もあるが『私』の身体は向こうにある、なんて奇妙なことが起きてるわけだな。

いわば俺は外付けハードディスクのようなものだろう。だから死んで『私』の記

憶が失われてもこうして容易に補完できる。

昨日一昨日は『私』の部分が前面に押し出されていたのだろうか……？

……まあ。いつか。難しいことを考えるのは俺の得意分野じゃない。それにいくら考えたって正解なんてどこでも分かりやしないのだし。

俺は俺だ。今こうして生きているのだし、認識はその程度で十分。

今日も張り切って生きていこう——！！

……オウガテイル犬つころろに不意打ちされて殺された。解せぬ。

吸血鬼は諦める

7ヶ月と2日目 嵐……竜巻? 天気は曇り

前回の日記から少し時間が空いた。色々とやる事が多くて中々時間が取れなかったんだ。

というのも、この2ヶ月ほど原作の進捗具合を確認してたんだ。練血で夜霧の衣とナイトストーカーを使い隠密重視で動き回り嚴重に口と鼻の周りをマフラーみたいに巻いて匂いを嗅げないようにして人がいるところに忍び込み……とか、色々とね。

それで分かったことはやっぱりまだ原作開始まで時間がかかなりあるようだ。

まず前提として、神機は作られているが、ピストル型から得られたコアを使つて第一世代の神機開発に四苦八苦しているのが現状。

まあ無理もない。神機はある種生物兵器のようなものだ。開発、運用を開始するまで時間がかかっても仕方が無いと思う。幾ら人類滅亡にリーチがかかっているとはいえ……否リーチがかかっているからこそフェンリルはより人間に犠牲を出さ無いようにしなければいけない。

それに、恐らくもつとコアが集められれば進捗も捗るのだろうがその為に人を使い潰

すわけには行かないのだろう。

ゴッドイーターになれる存在は希少だ。使い潰した結果手遅れになって滅亡しましたでは笑い話にもならない。

そんな訳で第一世代の開発が難航しているのだろう。

……これ、俺がアラガミ狩りまくってるからそれも影響して遅れてる……なんてことは、ないよな……？

7ヶ月と4日目 雨

どうも以前の心配は杞憂だったようで、先日漸く開発の目処がたったみたいだ。なんてタイムリー。

めちやくちや安心した。

俺という異物が存在するとはいえ、まだ原作にはあまり関与していない。その過程で元のシナリオから大幅にズレてしまったら……って不安だった。杞憂だったけど。

……原作自体、かなりの綱渡りの上で漸く束の間の平穏を手に入れるんだ。少しでも脇道に逸れていたらそれだけで全てが台無しになってしまおう中、俺という存在の所為で未来が変わってしまったら……考えるだけで、震えが止まらない。

未来が変わる、変わってしまう。つまりそれは俺の行動如何によって何千、下手すれ

ば何万の人の命が失われてしまう。もしかしたら考えすぎかもしれない、例え俺の介入があつたとしても歴史の修正力がどうにかしてくれるかもしれない。でもそれはただの樂觀視で現実逃避だ。今を生きてるのだから今を精一杯生きろ、なんてこれを見た誰かに言われてしまうかもしれない。けど未来を知ってる上でとる行動って考える以上に重いんだ。

重すぎて……潰れてしまいそうな程に。

7ヶ月と5日目 (アラガミの) 血の雨

昨日日記を書き終わつたあとふと思つたんだ。……あれ？ 人間の匂いマスク付ければ解決しね？ って。でもよくよく考えたら無意味だった……あーあ、ホントどうしようか。

練血がもつと便利だつたら良かったんだけどそんな都合よくはいかないしなあ。

7ヶ月と6日目 晴れ

今更感漂うが、俺が普段使つてる武器……どういふ訳か劣化や損傷をしない？ みた。いや、もしかしたら素人目で確認しただけじゃわからないだけかも知れないが、少なくとも見た感じすり減っていたり切断力が悪くなったりなどしたことが無い。一

体どういふことだろうか。

形あるものはいつか壊れるのが運命のはず。なのにこれは壊れるの様子が無い。

……体の中に粒子化して収納している影響だろうか？ いやだがゲーム中でも武器ごと粒子化してたはずだ。ヤドリギから移動する時真つ先に武器が粒子化していた記憶がある……だとしたら仕様か？ ならムラクモの存在意義は……？ 俺にだけゲーム特有のご都合主義が働いてるとでも……？ ……そう言えば、アラガミの動作も殆どゲームと変わらない確立化された動きだった。俺と戦う時だけは。……この世界は、どういふ法則で成り立ってるんだ……？ まさか全部が全部私の夢であるわけが無いし……夢だとしたら神機が登場するわけが——俺の記憶か？ なら何故ゲームでは知りえなかった人々の生活や研究段階などを調べられたんだ？

……ああダメだ、考えれば考えるほど分からなくなる。

この世界は、俺は。一体なんなんだろう。

7ヶ月と7日目 雪

下手の考え休むに似たり。結局俺が考えた所で何かが判明するわけもなし。ならこの世界を未来が変わらないよう原作には関わらず、のんびり過ごしていくことにしよう。

いつ覚めるとも分からない夢なのだから。

2年と3ヶ月12日目 晴れ

久々に日記を手取る。最後に日記を書いてから1年半以上経ってるのか……意外と時間が経つのは早い物だ。

今回俺が日記を手を取ったのは、なんていうか……アレだ。なにか吐き出さないと気がすまなかったから。

何を吐き出したのかって言うと。

——— なぁんで榊博士が俺を探してるっぽいんですかねえ!?

一体俺が何をした!? この2年間ずっとひっそりアラガミ狩り続けてただけだぞ!
原作にも関与してない自信がある! なのに、なんで……?!

可笑しいだろ、絶対可笑しい。もしかして俺の行動が監視されていた……? ならば探す必要は無い、ピンポイントに俺に会いに来ればいいだけだ。それが無いってことは監視されてたわけじゃない? じゃあどうして……アラガミを狩りすぎた? いや、アイツらは腐る程いる。俺一人が食事兼戦闘訓練のためにぶち転がした所で変わる部分は無いはずだ。アラガミに食われたこともないからそこから俺の存在が判明することはないはず。ならばなぜ……?!

もしかして、記憶の消失は俺にも適用される……？俺が忘れた何かの中に原作に關与することがあった？ 思い当たることがあるとすれば……あるとすれば……そうだ、あの子供二人。ツバキとリンドウ……あの二人が生きてて、尚且つ祈る者のシヨールを未だ持っていたとしたらそこから俺の存在が露呈する可能性もある……か？ 幼い子供とはいえある程度成長していた。記憶力もあるはずだ。もしかしたらあの子たちが喋った可能性もある。

……ああクソ、こんなものどうしろってんだ。接触するか？ バカ言うな出来る訳が無い。博士が探してる、つまり俺の存在によってどこかが食い違った可能性もあるんだ。そんな中で不安要素を……いやでも、ゴッドイーターの護衛があるとはいえ彼がこのまま俺を探している間にアラガミに襲われて亡くならない可能性があるとでも？ こんな世界だ、どれだけ用心していても人は簡単に死ぬ。異常な身体能力に感覚、練血なんて力も持つてる俺もゴッドイーターも呆気なく死んでしまう世界だ。絶対なんて保証はどこにもない。

なら出て行って……出て行ってどうするってんだ？ 説得する？ 丸め込まれる未来しか想像出来ない。

……詰みじゃねえか。クソ……。

2年と3ヶ月13日目 クソ喰らえ

ダメだった。護衛のゴッドイーターがアラガミに一掃されて、博士が死にそうになつて居る場面で見ぬ振りなど出来なかった。……もしかしたら、これで良かったのかも出来ない……なんて現実逃避だけだ。

意外と博士は俺の事を追求はしてこなかった。聞かれたのはアラガミを神機も使わずに狩れるか否か。子供を二人助けたか否か。今までどのように生活していたのか、その程度。

追求されなくて良かったのか悪かったのか。もう俺には分からない。

それに俺が人の多い所で颯め面をするからか、ゲームでシオが隔離されていた部屋に似た所に居させてくれた。不思議なことに出入りも自由らしい。

……まあ、それもどうでもいいかもしれない。恐らくとつとつに未来も変わってしまった。今更俺が何かを考えた所でどうしようも出来ない。

……なんで俺がこんな目に……なんて愚痴つても仕方ないんだけど。愚痴らずにはいられない……本当に、なんで私ではなく俺なんだ。



雨宮リンドウ

俺があの人と出会ったのは、廃墟となった雪の寺の片隅。近くを闊歩するアラガミの気配に姉と二人隅で怯えながら寒さを凌いでた時の事だ。

そのアラガミはまるで——恐らく気の所為だろうが——俺達が怖がるのを楽しむかのようにギリギリのところを行ったり来たりしていた。正直見つかるとも時間の問題だと、半ば諦めていた時。

——突然アラガミの体が浮き上がり、地面から剣身が生えてきてアラガミを串刺しにし、そして刺さった場所を起点にするようにまた更に多くの剣身が内側から食い破るようにその身を穿いた。

まるで魔法のようなその光景は、俺達を更なる絶望へ落とす。

小型のアラガミだったから、もしかしたら。万が一にも逃げられる可能性もあった。けれどあれでは万が一にも——

多分俺はここで一度心が折れていたのだろうと思う。逃れられない絶望に。無力な自分自身に。

諦めて、目を瞑って、ただ運命に委ねようとして——

「……あれ？」

耳に飛び込んできたのは、知らない人の声だった。

目を開けて声の方向を見てみれば、一人の女性が立っていた。でも、安心することは出来ない。だって初めは恐怖しか感じなかったのだから。猫のように縦に割れた瞳孔、赤く紅く輝く不気味な瞳。見たことも無いマントのようなものと無骨な剣を持ったその人は、余りにも無表情で。まるで人の形をとったアラガミかと思ってしまったほど。姉も多分同じ感想だったのだろう、気丈に睨み返しながらも俺の手を握るその右手は痛いほど強く、そして小刻みに震えていたから。

「……子供？」

人ならざる者のようなあの人の二度目の声は、意外にも透き通った、しかし人間味のある声だった。

少々抑揚が足りないようだが……それでも、その声だけは初めて見た時感じた恐怖を払拭するほど優しさに満ち溢れていた。

「……まあ、いいか」

しかし、それもすぐに消え去る。冷たく、まるでこちらへの興味を一切失ったかのよう。感情は一切乗らず、機械のように無機質な声音。まるで本当に化け物のようで。

「死にたくなかったら着いてきて」

「……ええ？」

思わず呆気にとられてしまったのも無理からぬ事だと今でも思う。見捨てられるか、

殺されるか。二つに一つだと思つていた中でその言葉はあまりにも予想外に過ぎたから。

聞き間違えかと思ひ小さく出た言葉はただ一瞥されるだけで無視された。けれど少し先に行つたあとと振り返るその姿は嘘には見えなくて。

俺はあの人について行くことに決めた。どうせここで蹲つていても狩られる命なのだから微かな希望にでも縋つた方が良くと思へたから。

「これ、食べて」

姉を連れ去つて彼女について行くこと数分、瓦礫は一切合切排除された比較的綺麗な一軒家にたどり着いた。布団や家具などはないが最低限人が眠れる程度の場所もある。

その中で最初にされたのは少し汚れた、でも暖かそうな毛布を渡される事と、恐らく非常食らしきものを手渡される事だった。

一応警戒はしていたけど、人間三大欲求には逆らえない。

姉と一緒にぼつりとお礼をいって食べたそれは。パサパサで、味も濃すぎるくらい舌に纏わり付いて、控えめに言つて食べた物じや無いくらい不味かつた——けれど。自然と涙が出て来るくらい温かつた。

それから俺は微かにあつた警戒も取り去り、あの人に質問攻めするかの如く話し掛けた。少しだけウザがられるかもしれないと考えていたけれど彼女はそんなことを臆にも出さず静かに、けれど律儀にはつきりと答えてくれた。

名前はカナリアだということ。目はちよつとした事が原因でこうなったこと。アラガミを突き刺したのは今も羽織っているマントのようなものであること。アラガミを殺せる事。なんでも聞いた、なんでも答えてくれた。

それが嬉しくて楽しくて、また更に質問を重ねて話して、気付けば寝付いてしまつていた。

今思い返すと我ながら単純だと思つちまうが。今でもこれで良かったと思う。

「……ん、起きた？ おはよう」

「おはようー！」

「……おはようございませす」

翌目を覚ました時にはカナリアは既に起きていた。もしかしたら寝てないのかもしれないが、顔には微塵も現れていない。

有り触れた朝の挨拶を返して、俺はカナリアを見つめる。

一度眠つて興奮が冷めたのか先日のように質問攻めにはしなかったが、剣を見てなにかしているすぐ側でじつとその姿を観察していた。

姉も一日経つてある程度なにか許容したのだろう、先日よりも警戒は多分に薄れ近くに來ている。

……少し前は有り触れていて、昨日までは夢にも見た穏やかな朝だった。

朝飯もクソ不味くて温かいレーションを食べた後、今度は姉と一緒にカナリアと歓談した。

話してみるとどうにもカナリアは世間知らずという常識が欠けているのか時々突飛なことを言う。また独り言も多少あり、耳を傍立ててみれば神機がどーのゴツド……なんとかがこーのと呟いていた。

——神機が当たり前になつた今じや普通の独り言だが、まだ初期の段階だつたあの時の独り言にしては異様だ。深く考えちゃいなかったが、神機使いの一員になつた今ならそれがどれ程おかしな事なのかよく分かる。

それにその後突然襲來してきたアラガミの殺し方についても謎だらけだ。カナリアは吸血牙装ブラッドウェイルと言っていたが、そんな単語彼女以外からはついぞ聞いたことは無い。姉と二人ずつ同じものを貰ったがそれも少し奇抜な形をしたシヨールのようにしか見えな

い。
本当に謎だらけだ。……まあ、あの時の俺はそんなこと微塵も気にすることなくアラガミを瞬殺したカナリアにすげー！ カツケーツ！！ ってじゃれ着いてたんだが——

しかし、出会いがあれば別れもあるように。彼女との別れは唐突に訪れた。

翌日の事だ。朝起きて、メシ食って。カナリアが俺達を人のいる場所に連れていく、そういつた時のこと。音もなく空から震ってきたゴリラのようなアラガミに彼女は呆気なく殴り飛ばされた。外はアラガミの巣窟だ、けれど周りは雪が積もっている。恐らく、俺達という庇護対象を連れて動くのは不慣れだったのだろう。俺達に注意を割き周りの警戒が疎かになった瞬間を運悪く奇襲された。

その瞬間は状況を理解出来なかった。初めてあつた時の強さ。前日アラガミを瞬殺した凄さ。それを目の当たりにしているからこそ訳が分からなかった。

なぜ彼女が吹き飛ばされているのか。家屋にぶつかって真つ赤なザクロが咲いているのか。

「つ、え……」

まだ生きている彼女の口から花が飛び散る。真つ白な雪はそれを吸い取り鮮やかな色を点す。

遠くから誰かの足音が聞こえた。動いたアラガミが追い打ちをかけるように彼女方へ向かっている。それを見て何かしなきゃと焦燥に駆られるも、姉も俺も困惑と徐々に現実を認識し始めたが故の恐怖で体が動かない。動けない。

ダメだ、このまま行かせたらカナリアが、でもなんの力もない俺達がなにかした所でどうなる？

悩んで悩んで悩み抜いて……その時の俺達には、答えなんて出せなかった。ただ、目の前でまた人が殺されるのを見ることしか出来ない——

「——えろ……っ、にげ、ろおッ!!」

——はずだった。体から血を流し血反吐を吐きながら彼女が言う。その言葉が聞こえた瞬間、まるで体は自分のものでは無いかの如く弾かれたようにアラガミのいな方向へ、微かな足音がした方向へ駆け出していった。

——見捨てた。

後ろからは鈍く耳に残る不快な音がして、アラガミの気配は消え失せる。それでも、足が止まることは無い。後ろを見ないように前だけを見て体全身を使いながら歩きづらい雪な上を走る。

——もしかしたら、どうにかすれば、助けられたかもしれないのに。

走って、走って……武装した大人たちの元につく頃には、周囲にアラガミの気配どころかあの人の気配さえもなくなっていた。

——彼女の最期の姿が瞼の裏に焼き付いて離れない。不器用だった。感情が表情や声にまるで出ない人だった。この地獄のような世界で、優しい、人だった。

——その人を、俺達は命欲しさに見捨てたのだと。まるで責めるかのごとく、胸が傷んだ。

その後、俺達は極東支部にて保護されることになった。その場所で幼馴染みであるさくやに出会ったり。紆余曲折を経て姉も俺もゴッドイーターになる。誰かを守るための力を欲して。もう二度と、あの時のような無力感と絶望の中見捨てることがないようにと。そう、心に固く誓って

吸血鬼は逃避する

レヴナント、という存在がいる。

BOR 寄生体と呼ばれる物を埋め込まれて蘇った死者。血を啜るしか生きる手段のない哀れな吸血鬼。

俺はその存在の、とある一人に焦点を当てた世界を見ていた——プレイヤーとして。

ゲームだったんだ、所詮は。感情移入することはあれど可哀想だな、こうなればいいな、なんて高みの見物をしながら彼／彼女を操作して世界を楽しんでいた。

——それが。

それが、こんな状況に陥るなんて……誰も想像できないだろ……？

最初に感じたのは凍えるほどの寒さだった。

直前の記憶では夏だったから冷房の掛け過ぎかな、なんて思っていたけれど、感じる

感触はそんなものじゃなかった。体温によって溶け湿っていくなにかの感触。凍えるほどの寒さなのに悴むことのない手足の感覚。

訝しんで目を開けてみれば、視界に映るのは一面の白い世界。まるで昭和の世界に紛れ込んでしまったのかと思うくらいに古く荘厳な家屋。囁かし綺麗だったのだろうかと思う——それが、まるでなにか巨大なものに食い荒らされたような姿でなければ。

——なんだ、これは？

何処か見覚えのある景色。

何処か見覚えのある環境。

何処か見覚えのある痕跡。

現実にはありえない光景。

だって、そうだ。この景色は、これは、この場所は……俺がゲームとして知っている、場所なのだから。

体を起しながら、夢だろうか。なんて考えようとしてみても、体に感じる感覚や風の寒さ、肌張り付いた服の感触はその思考を真つ向から否定してくる。

ありえないなんてことはありえない、とはよく言われるが、だとしてもコレが現実だとは認めたくなかった。……認めるわけには、いかなかった。

ゴツドイーター、通料GEと呼ばれるゲームが有る。そのゲームは大凡デイストピアのような世界の中、数少ない人間がアラガミと呼ばれる存在に対抗するために戦う、そんなゲーム。一般人が死ぬのは当たり前前、チュートリアルで名有りのキャラが頭から食われることも日常茶飯事。

一歩間違えればイコール死の世界観。

もし仮にゲームの中に行けますよと唆されても俺は絶対に選びたくないと思うようなゲーム。

だからこそ認めたくなかった。なぜならここは、そのゲームの中に存在する『鎮魂の廃寺』という場所に目の前の風景は酷似しているのだから。

認めたくない。認めてなるものか。必死に自分に言い聞かせるものの、耳に聞こえる風の音も、遠くから聞こえる化け物——アラガミの、叫び声も。すべてが無慈悲にここは現実なのだ突き付けてくる。

「は、はは……」

認めるしかなかった。認める以外の選択肢が欠片も存在しなかった。

夢なんだと、自己解釈して楽しめるような楽観的な性格だったらどれ程良かったらうか。

異世界転移だと喜べるような世界だったらどれ程良かっただろうか。認めるしか無いんだ、コレが現実なんだと。この世界が今、自分が生きている場所なのだ。

——唐突に、吐き気がした。

◇◇◇◇

2年と3ヶ月14日目 不明

博士の考えることが全く以て理解できない。

この部屋に連れてこられた時もその後も、博士は簡単な質問こそすれど確信に迫ることとは一切聞いてこない。ただ雑談のようなものをしながら糸のように細められた眼でじつとこちらを見ているのみ。

これであからさまにこちらを警戒していたり、研究対象としての興味を示してくれればわかりやすいんだが、そんなものは一切ない。ただ本当に楽しげに、嬉しそうに俺と歓談しながら忘れていたかのように時折観察するような視線しか向けてこない。

はつきり言って不気味と言う他ない。なんなんだこの人は。俺を探し当ててこの場

所につれてきて、一体何をしようとしているんだ？

昨晚も寝た振りしながら様子を見てみたが、夜になつてもなにかしてくるようなこともなく、朝になつておはよう。昼になつて目の前で毒味をされた後提供された飯を食いつ話すだけ。意味がわからない、理解できない。この状況は一体何なんだ？俺が知つている博士ならば好奇心は人一倍多く、時と場合はある程度考えはしても基本的に好奇心に忠実な人物だ。間違つても慈善事業で俺のような不審者を匿い歓談に耽るような人間ではない。

……一体、この人は何がしたいのだろうか？

2年と3ヶ月26日目 晴れ

抜け出した。隙きをつけてナイトストーカーに夜霧の衣を使って誰にも見つからないように静かに行動しながらあの場所から抜け出した。……いや、逃げ出した、つて言つた方が正しいのかもしれない。

原作と大きく乖離しているように見える博士の性格。これ以上俺がいることによる予期せぬ悪影響。あと、そろそろ血の渴きが限界に達しそつたつてのものもあるけど、正直それは口実に近いものがある。

結局俺は怖かつたんだ。博士の一挙手一投足が。この先の未来がこれ以上不透明に

なる未知が。小動物のように怯えて、警戒して、逃げ出した。……我ながらどうかしていると思うけれど、どうすることも出来なかった。

私としてはそのまま良かったのかもしれない。けれど俺という異物が許容できなかった。

……こんなことなら、原作という未来のことなど知らなければよかった。

2年と3ヶ月30日目 雪

とりあえず、数日様子を見てみたがまた博士に探されている、ということはなさそうだった。

極東付近も不気味なほどいつも通り、ともすれば少々活気あふれているだろうか？

と思える程。恐らく第一世代ゴッドイーターが本格的に始動し始め初期より大幅にアラガミに対処または殲滅しやすくなったのが理由だろう。

流石に大型のアラガミなどには苦戦しているみたいだが、多人数で相手することによって何とか凌いでいる。凌いでいる。その事実は例えゴッドイーターと言う存在を身近に感じることの少ない一般市民でも情報として知れば浮かれはするというもの。

原作以前のことをあまり詳しく知らないが、こういう部分は原作とほぼ変わっていないのだと思う。

それに、今の極東はまだアラガミが超進化を遂げて随一のバケモノになる前の状態だ。主人公勢やその他極東の人間の阿修羅感を考えれば妥当であると思いたい。

そんな情報収集をしながら極東を監視しつつ、俺も一応アラガミを狩っていた。まあ半ば食事みたいなものだし。ともすればコレを欠かせば俺は俺でなくなってしまう可能性もあるのだから。

3年と7ヶ月12日目 雪

博士のところから逃げ出して、久しぶりに日記を書く。なんだかんだ期間をあけているとはいえこれだけ長続きしていることに自分でも驚きだ。自己評価では有るけど、結構な飽き性だと思つてただけどなあ……。

まあ、そんなことはどうでも良くて。

今日も今日とてアラガミを狩りながらうろちよろしていたら、見知った面影の有る人物を目にしたんだ。

と言うかツバキだった。第1世代の神機持つてアラガミとドンパチしていた。まだ慣れきっていないのか動作もたどたどしく、俺から見てもまだ新兵に毛が生えた程度だけど——それでも、今を生きようと必死に戦っていた。

ある種死に別れみたいなきことをした後現場に行つてみたけれど、やっぱり血の匂いは

しなかったし吸血牙装も落ちていなかったから大丈夫だろう、なんて考えていたが、やっぱり自分の目で無事なことを確認して、かつ必死に生きている所を見るだけでも安心するものだな。

思わず駆け寄ってアラガミを殲滅して、よく頑張ったなって抱きしめてあげたくなっただけ、よく考えなくても俺はあの2人の前で一度死んでるし、何より身体は女だとしても心が男な俺が抱きしめるとかハードルが高いこと出来るわけもなく断念。

……リンドウも、今を必死に生きているのだろうか。トラウマになっただけならいいなあ。

3年と7ヶ月13日目 嵐

グボロ・グボロを発見した。

グボロ・グボロを、発見した。なんかのたうち回りながら右往左往して壁とか土とか捕食していて、なんていうんだろうな……メツチャキモかった。

見敵必殺で真つ二つにした俺の判断は間違っていないと思う。考えてみてくれ、オウガテイルも確かにサイズがでかくて怖いしキモい。コンゴウなんてもう恐ろしくてたまらないしキモい。でもこの二体はある程度の可愛さと言うか、なんていうか……こう、見慣れた感があった。

でもグボロ・グボロは違う。っていうかなんでアイツ嵐の中でテカってるんだよ。せめて輝けよ。いやそれはそれでキモいけど。なに？ 魚類なの？ 魚なの？ なんか油出てるの？ 油出るのはテスカトリポカで十分だと思っただが????? いやしかし、もうグボロ・グボロなんてでてるのかーって考えると、アラガミもますます進化しているのだなと実感する。もしかしたら俺が偶然出会わなかっただけでもっと前から存在していた可能性も否めないが。

3年と7ヶ月18日目 血の雨と血の洪水

グボロ・グボロの群れに遭遇した。何あれキモチワルイ。

3年と7ヶ月19日目 雪

……アラガミって、群れるのか……いやでも確かに、ゲームでも同じ種類が四体とかザラにあっただけども、1000単位で群れるとか流石に予想外。

まだ極東ってアラガミそこまで凶暴化してないよな？ 地獄とかしてないはずだよな？ なのになんで……？ いやまあ、軽く5ヶ月位は飲まなくても大丈夫なくらい吸血させてもらったから良いけども……これが普通に起きることなのだとしたら、ゴツドイーターの大変さ想像を上回るな。

らない。こうしてもしものことを考えるだけでも臓腑の底からふつつつと形容し難い何かが湧き上がってくるのだから、ああ、やっぱり敵対しなくてよかった。